おわりに

本書のタイトル『環太平洋の原初舟：出ユーラシア人類史学への序章』について最後に一言記したい。とくに副題の出ユーラシアであるが、これは序論に書いたとおり筆者が参加させて頂いている新学術科研「出ユーラシアの統合的人類史学――文明創出メカニズムの解明」（代表　松本直子）の計画研究「A01班：人工的環境の構築と時空間認知の発達」（代表　鶴見英成）の成果として出したことと大きく関係する。

当初副題は「出ユーラシア集団のハードウェア」として、次に準備している民族天文学やコスモロジー、とくに航海術や暦および天文神話の著作を「出ユーラシア集団のソフトウェア」とすることを考えていた。しかし舟を含めた技術は認知の問題や神話や伝承から切り離さないというのが、筆者の一環した姿勢であったので、「ハードウェア」「ソフトウェア」という分け方は、筆者の姿勢とうまく整合しないと思ったからだ。

また副題を「序説」としたが、むしろ「研究ノート」の方が適切かもしれないと思っている。

これは筆者が学んでいた東大文学部の印度哲学の講義の記憶がベースにあるからだ。その講義では「印哲」の卒論にはサンスクリット語の短い経典の翻訳だが、そこで本文の翻訳部分より注釈部が何倍も分量が多いというのを聞いた記憶が残っているからだ。その延長で人類学も注釈の学問ではないかと思うように至ったからである。

つまり人類学者は人々の行動や慣習に関して記述するが、それには膨大な注釈が必要である。たとえば家を作る技術はカヌーを作る技術と関連し、家を作ることでカヌー製作法も学ぶ。しかし家を作る椰子の実ロープの縒り方はカヌーを結ぶロープの縒りとは違う、などの注釈である。

つまり人類学も異文化をきれいな理論で説明し尽くすことを目指すのではなく、部分的な解釈、あるいは一見異なっている文化現象や行動の間に張り巡らされた膨大な「リンク」を開示することを目指すべきではないかと考えるからだ。

その流れで本書は首尾一貫した体系的な著作ではなく、原初舟をめぐって様々な角度から注釈したノートというべきものを目指した。とくに筆者が2003年から2013年まで研究人生の大きな部分を賭けてきた、沖縄国際海洋博覧会記念公園・海洋文化館に展示されているカヌーの注釈とすることも本書の目的の一つである。

十数年にわたる舟研究の過程でお世話になった方々はあまりにも多い。遺漏があるといけないのでむしろお名前は記さないことにする。写真の提供を快諾された沖縄国際海洋博覧会記念公園管理センター、スタジオ海工房および南山大学人類学博物館、また本書の編集で手を煩わせた南山大学人類学研究所プロジェクト研究員の加藤英明氏および「あるむ」の舞木望氏への謝辞のみ記すこととする。

なお本モノグラフは南山大学人類学研究所の新しいシリーズの創刊号となる。筆者がライフワークのひとつとして成果をまとめたいという提案に賛同していただいた渡部森哉所長と宮脇千絵第1種研究所員、ならびに第2種研究所員の皆様、また印刷所との原稿のやり取りでお世話になった事務室の皆様に感謝をしたい。

ありがとうございました。